

巻頭言

日本一の飯炊き名人

(特非) シビルNPO連携プラットフォーム 理事
(株) 熊谷組 相談役
大田 弘



私の故郷は富山県黒部市宇奈月町である。同町は大正時代に開始された黒部川水力発電の開発拠点である。黒部川は日本を代表する急流河川であり、水力発電にはうってつけの豊富な水量と高低差を有する。今でこそ、下流に位置する扇状地は 200 年を超える治水事業により豊かな穀倉地帯となったが、江戸時代は洪水との厳しい戦いが繰り返されていた。

クロヨンの名で知られる黒部川第四発電所が完成したのは昭和 38 年、私が小学 5 年生の時。多くの村人がクロヨンで働いていた。そして、命を落とした人、傷ついた人がいた。クロヨン建設の成否が掛かった長野県大町からの資材搬入ルート・大町トンネル(5,000m)は途中で大断層・破砕帯に遭遇し、日本の土木史上でも屈指の難工事となった。僅か 70m の破砕帯を突破するのに 8 ヶ月間を要したが、この様子がリアルに再現されたのが映画「黒部の太陽」であり、観客数が 700 万人を超える空前の大ヒットとなった。この映画では土木技術者を中心に多くのヒーローが描かれており、当時の若者がこれに感動し土木界を目指すきっかけともなった。私もその一人である。

10 年ほど前に村に帰った時のこと。村の老女が私にこう言った。

「弘ちゃんは建設会社に勤めているそうだけど、クロヨンを知っているかい？」

「私はクロヨンで賄い婦をしていて、日本一の飯炊き名人と言われていたの」

「当時の男衆の元気の源は少ないおかずで腹一杯、ご飯を食べること。一人で 1 日平均 7 合を平らげたの」

「気圧が低い標高 1,500m の所で美味しいご飯を炊くのは難しくてね。そりゃあ色々工夫をしたの」

「みんな美味しい美味しいと言ってくれてね。また、元気に現場に出て行ったの」

「だからね、こう言っちゃなんだけれど、クロヨンは私が作ったようなものなの」

延べ 1,000 万人の人々が力を合わせて造り上げたクロヨン。この老女の自慢話を聞いて私は涙が溢れた。語り継がれるヒーローは極々一部の人。しかし、無名の多くの人々にそれぞれの誇り、それぞれのクロヨンがあってこそ前人未到の地で世紀の偉業を成し遂げることができたのだ。

クロヨンが遺したものの一つは戦後の経済発展という「お金」。一つは土木技術・クロヨンという「物」。そして最も凄いことは“志の連鎖”という「人」であったのではないか。お互いに励まし合い、持ち味を認め合い、力を合わせて一生懸命に頑張る姿。留まることのない物質的豊かさの追求、節操のない競争主義、これらと引き換えに「日本一の飯炊き名人」の存在を忘れ、一番大切なものを何処かに置き去りにしたまま、我々は“暴走”を繰り返して来たのではなかろうか。

今、建設界では将来の担い手の危機的な減少が予想されている。このままでは更新期を迎える社会インフラの再整備すら危ぶまれる。そして、その対策として通称「担い手三法」といわれる法律改正が行われ、その運用が開始されたところである。

これには「発注者責任」と「受注者責任」が明記される。「発注者責任」とは、品質確保や担い手確保を受注者の自己責任に全てを委ねることなく、適切な価格・工期で発注しなければならないということ。「受注者責任」とは、技術的根拠のない安値受注、いわゆるダンピングをしてはならないということ。受注者である建設業は、同時に取引先に対する発注者責任も負うことになる。

価格至上主義の結果、疲弊した最前線の技能工などの担い手が希望の持てる真っ当な就労環境を取り戻そうという取組みが始まったのである。

この法律改正が適切に浸透・運用された証は再び「日本一の飯炊き名人」が各地で現れることだ。

「籠に乗る人担ぐ人。そのまた草鞋を作る人」を商いの根っこに据えてきた日本。これから大きく遠ざかった現代社会に身を置く一人として、自戒の念を込め、忘れ物探しの巡業に出ようと思う。

